

身も心もまる裸

北澤博史

自分の国を守ることであるのなら国民の犠牲はつきものである。戦前の大人達は、国の行いの良し悪しは別として、みんなそうやって行動していたようだ。

私が五歳で満州へ連れて行かれた昭和十五年ごろは、戦争のため日本の経済は貧しかったという。戦争に勝って国をよくしよう、そのために、日本は満州を侵略し経済を立て直しをしようと思いついたらしい。

「満州は日本の生命線」とまで言いきった満鉄の総裁、国策として満州の大地に行くのであるからと、軍を信頼し、満州に憧れた日本国民の声。

昭和十年、康德二年に辛亥革命を起こした孫文は、腐敗しきっていた清王朝の溥儀を紫禁城から追放してしまった。溥儀さんはそのとき天津に逃れた。その時以来、一般市民の生活をしていただけと聞く。そこへ日本軍が溥儀さんを訪ねて、満州国を造りませんかという、願ってもない提案に溥儀さんは同意した。そして紫禁城に戻り、復辟をはたすためでもあったのだが、日本は侵略者でないことを外に宣伝しながら、満州国を建立し、その全土を植民地にする思惑があった。

日本は、満州国の皇帝に溥儀さんを即位させた。溥儀は、皇帝とは名ばかり、傀儡政権のもとで、日本の国策に利用されているだけだった。そればかりか中国は、国民党軍、奉天軍、蒙古軍、共産党軍などと内戦状態にあり、国民の士気は乱れていた。あるとき日本の某大学で医学を学んでいた魯迅さんは、中国の映画を見て気づいたという。医者になって一人の病人を治すより、作家になって十億の民の精神の治療の方が大切と考え、国に戻って文筆活動を始めた話は有名だ。

日本軍部の手による奉天軍の張作霖爆殺事件以来、日本軍は信頼を失い、西安においては、蒋介石の軍門に降った張作霖の子息、張学良が蒋介石を軟禁、反乱を起こした。それを知った共産党の周恩来が西安に飛んだ。西安事件である。周恩来は張学良を説得し、お互いに内戦を止めて、国家統一のため、日本軍と戦うことになる。抗日戦である。

日本は、治安の悪い中国東北部・満州へ食糧増産、祖国防衛とあって、武装開拓移民を送り込んで行った。農地は現地農民のものを奪い、地主を小作人として雇い入れた開拓地もあった。私が物心のついたころ、中国人は米を食べない民族だと思っていた。そんなある日、父に向かって、「お父さん、中国人って人間？」と聞くと、「そうだよ、立派な国の民族だよ」と言った。どこの国の民族なんだろうかと、わからないことが多かった。

昭和十九年、私は小学校四年生だった。上には高等科一年生と小学校五年生の二人の姉に、下には一年生と、五歳と二歳の第三人の六人姉弟だった。母はこの年の秋になって、体調が悪くなり、四キロほど離れている学校近くの診療所に入院することになった。

母のいない家は、急に暗くて侘びしげな村の一軒家だと周囲の人から見られるようになり、同情の言葉も聞かされるようになっていくのが辛かった。

そのころの学校の授業時といえば軍歌ばかりで、団員の出征を見送るたびに、学童に涙の絶える日はなかった。

昭和二十年の四月、野原には青草の芽が一面目立つようになり、ナズナ、ミツバなどの摘み草の季節がやってきた。母は一目、澄みきった春の景色を眺めたかったと思ったようだが、願いもむなしく三十四歳でこの世を去ってしまった。さぞかし無念だったと思う。野良仕事の経験もなかったが、満州に行けば王道の道がひらけると思ったのだ。

戦況の悪化とともに兵役年齢が十五歳以上、四十五歳となった。父にも赤紙が来るのではないか。六人の子供を見つめ、不安な日々を過ごしているうち、七月に赤紙の召集令状がきた。軍では厳しい掟を守らなければならない。

開拓移民には、主婦、老人、子供たちでは役に立たない戦場の予感がしてきたのである。ソ満国境周辺に配置されている開拓民に対して、満州はお前たちが守れと言われ、留守家族の主婦には、国防婦人会なるものを結成し、竹槍の訓練が強要されるようになった。

八月になった。ソ連軍が攻めてくるから村から避難することになった、と親戚のおばさんが言ってきた。戦争に敗けたとは言わなかった。

戦争が終わって、わたくしたちが内地に帰る日がやってきた。戦地に行った父も帰ってくるかも知れない。姉弟は期待して待っていた。

翌朝、村を出るため道路に出て学校の方を見ると、すごい勢いで火の手が上がっているのが見えた。電話も通じない。人のざわめき声が聞こえて来た。団全員は集合場所へ急いだ。

襲撃、略奪、自殺者が出る。開拓団の本部や学校の男子職員はソ連に連行されたい。難民となって一週間も経たないうちに、大人達の態度が豹変していくのを見た。頼りにしていたおばさんも行方不明になってしまった。戦争に負けたということは国籍のない民族になったことになる。

日本に帰るため、ある団はハルピンをめざし、われわれの団は関東軍の駐屯地のある松花江をめざして歩き始めた。途中、山へ避難し、自決した団員も二百名を超える。

神国と教えられた日本人の姿は無惨にも地獄に落ちたのだ。五族協和、日、満、蒙、朝、漢とはいったいどこから出た話だったのか、五十六種族も民族を持っている中国である。

五族でさえ抗日の案内役をつとめた、最悪の敵に変貌した。何がそうさせたのか。武力によって奪った農地だからである。方正県にある松花江に引き揚げ船が来るかもしれない。軍が守ってくれるかも知れない。難民の願いは軍部にとどくどころか、裏切られていたのに気づくべきだったが、どうにもならない。飢餓と伝染病におかされて死んで行くだけ。生き恥をさらすな、お国のために死んで行くのは国民の美德だと思わされていたが、収容所の難民は、生きて祖国に帰りたいという望みを捨てきれず、満州全土から集まってきた。

十月になった。蟬のように黒く痩せ細った弟が死んだときは、一メートルほど地面を掘って籠を掛けて埋葬できたが、その後は、予め予想した死者のためにと、相当広くて深い埋葬用の穴が二カ所用意された。みんな夏服のままだった。厳しい寒さの中、死体は積み重なり、おまけに身ぐるみはがされ、雪吹雪にさらされたままとなった。収容者八千名、死者五千名と中和鎮の文集に記されている。

それから十数年後、中国人民政府によって罪のない開拓移民家族の慰霊碑が建立された。これは日本残留婦人の願いでもあった。加害者の墓を被害者の国に守らせている。私はこの事実を日本国民に知ってもらうためにこの手記を書いた。